

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成24年度大学入試センター試験の公民科受験者数（追・再試験を含む。）は、242,363人で、昨年度比82,694人（25.4%）の減少となった。原因として、今年度から地理歴史・公民10科目の中から最大2科目まで選択できるようになったことや、「第一解答科目」の設定など、試験制度の大きな変更による影響が考えられる。

各科目の受験者数について見ると、「現代社会」は昨年度比72,223人（40.6%）、「倫理」は22,734人（39.0%）、「政治・経済」は昨年度比31,543人（35.5%）といずれも大きく減少した。一方、今年度より新設された「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）の受験者数は49,668人となった。仮に「倫政」の受験者を「倫理」学習者とするならば、85,254人となり、昨年の「倫理」受験者より26,934人の増加となる。同様に「倫政」の受験者を「政治・経済」学習者とするならば、106,943人となり、昨年の「政治・経済」受験者より18,125人の増加となる。つまり見方によっては、「倫理」「政治・経済」学習者はむしろ、ともに増加したとも捉えられる。

教科内の平均点については、最も高い「倫理」（69.01点）と、最も低い「現代社会」（52.10点）との差は16.91点となった。得点調整の必要がないとは言え、この差は今後の高等学校における学習指導や、受験者の学習に対する姿勢に何らかの影響を与えることが懸念される。公民科科目の作問関係者には、この点にも十分留意していただきたい。

今年度から新設された「倫政」は、全ての設問が「倫理」「政治・経済」との共通問題として出題され、「倫政」単独の設問はなかった。これは、本試験も同様である。大問6問で構成され、「倫理」「政治・経済」から、それぞれ3問ずつ出題された。「倫理」分野では、リード文の一部に難解な内容が含まれていたが、全体的に倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、「倫理」を学んで来た受験者を大いに啓発するものであった。第3問にはリード文がなく、学習効果を考えるとリード文の重要性が再認識される。一方、「政治・経済」分野では第4問のリード文はオリジナルのものであるが、小問は本問からの抜粋であり、第5問、第6問は本問の第3問、第4問をそのまま引用している。各大問が示すテーマを通じて、受験者に対して「政治・経済」を学ぶ意義と、現代社会の諸課題について認識し考察する契機となるものであった。

全体の難易度は、例年の「倫理」「政治・経済」とほぼ同様であり、教科書レベルの基礎的な知識や理解力を問う問題が中心であった。ただ、「倫理」分野では、取り扱う課題が抽象的な理論だけでなく、受験者の実生活と深く関連する題材を、「政治・経済」分野では、知識・理解を問うだけでなく、思考力や判断力、応用力など様々な能力を試す出題をより多く取り扱うことを求めている。

出題は、「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問となっており、配点は両分野50点ずつで、バランス良く出題されている。出題内容からは受験者に対して、現代の社会的事象を、多面的・多角的に考察させ、かつ国際的な広い視野を育てようという、高等学校学習指導要領の主旨

に沿った出題者の意図が感じられる。

以上のことを踏まえ、細部にわたる評価に当たっては、次の点に留意して行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標及び内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) 基礎的・基本的なものから総合的な思考力、判断力、応用力を問うものまでバランス良く出題されているか。
- (3) 「倫理分野」については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済分野」については、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すよう工夫されているか。

2 試験問題の内容・範囲等について

試験問題の内容及び出題範囲については、高等学校学習指導要領において示された分野から、適切に出題されていると考えられる。以下に大問及び設問ごとの範囲や内容、程度等に関する分析を示す。

第1問 「日本人にとっての悲しみ」について（日本の思想、源流思想）

古代から近現代まで、先人たちの思想を時系列に取り上げ、日本人にとっての悲しみをテーマに論じるリード文である。古代では『古事記』、『万葉集』に見られる悲しみの感情の在り方、仏教流入以降の悲しみの捉え方、近世の儒学や国学における悲しみ、現代では和辻哲郎を取り上げながら、バランス良く網羅的に出題されている。分かりやすい文章で、受験者に対するメッセージ性もあるが、和辻哲郎に関する文章については難解であった。全体的には標準的な難易度である。

問1 賀茂真淵が『万葉集』の中に見いだした「ますらをぶり」の基礎的理解を問う設問で、難易度としては平易である。選択肢の中に対義語である「たをやめぶり」が含まれているところからも判断しやすい設問である。

問2 四諦、四法印、八苦の内容をそれぞれ理解した上で整理していないと混乱してしまうであろう、よく練られ総合力を試す良問である。特に、五蘊盛苦ごうんじょうくに関する④の記述の正誤の判断が求められ、やや難しい設問である。

問3 源信の『往生要集』の中に見られる「厭離穢土おんりえど、欣求淨土こんぐじょうど」の語句を選ばせる設問で、教科書の基礎的な用語についての知識を問うものであり、平易な設問である。

問4 孟子の王道政治に関する正しい記述を選択する設問である。下線部の孔子から孟子を導いている点に不自然さはあるが、王道政治の基本的な理解があれば正解を導ける平易な設問である。

問5 本居宣長の国学思想の内容について問う設問である。基本的な学習内容を理解していれば解答できるが、各選択肢が比較的長く、思考力も試される良問である。本居宣長の古道の精神が、決して過去のものではなく、今を生きる日本人の心の深層に脈々と流れていることを理解していれば難しくない。難易度としては標準的な設問である。

問6 和辻哲郎の「間柄的存在」の概念が、個別性と全体性を弁証法的に止揚したものである

ことを問う設問である。各選択肢の文章は4行あり、また文章中に「弁証法」や「止揚」等のキーワードがないため、かなりの思考力を要し、教科書の表面的な学習だけでは解答できない。①の「再び否定」「相互運動」という文言が弁証法的運動を示していることに気付けるかどうか判断基準となる。倫理的思考能力を問う良問であるが、難易度としてはやや難問である。

問7 リード文中の空欄について適当な文章を選択する形式の設問であるが、リード文全体を熟読する必要がある、読解力と思考力を要する。受験者はかなりの時間を要したのではない。難易度としては標準的な設問である。

第2問 「真理の位置付け」について（西洋近現代思想、現代社会の諸課題と倫理）

リード文は、真理の位置付けについて、理性中心主義から感性や芸術の重要性の認識、実存主義、道具的理性への批判などの変遷を概観し、科学や哲学、芸術など様々な分野を通して真理を探究することの大切さを述べており、よくまとめられている。価値観が多様化し、情報が氾濫する現代社会に生きる私たちに対してもメッセージ性を持っている。全体としては標準的な難易度である。

問1 デカルトが真理獲得の基準とした「明晰判明」の意味を問う設問である。『方法序説』で学問的方法として述べられている「明証・分析・総合・枚举」の4規則の一つであるが、それを学習していなくても、「明晰判明」の意味を考えれば解答できる。標準的な難易度の設問である。

問2 近代的な国家や市民社会の在り方を説いた思想家に関する設問である。いずれも教科書で取り上げられている思想家とその中心思想であり平易である。もう少し思考判断を求める設問にしてもよいと思われる。

問3 キルケゴールの「主体的真理」の意味を問う設問である。「私にとって真理であるような真理を発見し、私がそのために生き、そして死ぬことを願うような真理を見いだすことが重要なのだ」という彼の日記の一節は教科書等でも取り上げられている。これが選択肢の文の「自らの身を捧げてでも」に符合することに気付けば解答できる。標準的な難易度の設問である。

問4 理性によって理性の限界を克服するためにハーバーマスが強調した事柄を問う設問である。彼の思想のキーワードである「コミュニケーション的合理性」（対話的理性）を思い出せば解答できる。標準的な難易度の設問である。

問5 「情報リテラシー」の意味を問う設問だが、選択肢で迷うものがなく、かなり平易な設問である。

問6 人物とその考えを組み合わせる設問である。選択肢が八つと多いが、全ての人物が教科書でも取り上げられる著名な人物であり、迷うことが少なく平易な設問である。

問7 リード文の趣旨に合致する記述を選ぶ設問である。選択肢の文がやや長い、本文をよく読めば解答できる。標準的な難易度の設問である。

第3問 「倫理」総合問題

リード文なしの出題であった。設問は「倫理」追・再試験の第1問（青年期の課題）、第2問（源流思想）及び第5問（現代の諸課題と倫理）から同一問題が出題された。リード文がな

いと、個々の問題に関連性がなくなり、リード文があった時に感じるような新たな視点の発見や理解の深まりが見られず、改めてリード文の大切さを実感した。できれば、リード文のある問題作成をお願いしたい。基本的な知識を中心として、思考力、判断力を問う問題で構成されている。全体としては、標準的な難易度である。

問1 他者との対立解決の行動についてのグラフを読み解く問題である。グラフ下の語句説明を読み、選択肢中の文と置き換えなければならないが、正解を選ぶのは難しくない。標準的な難易度の設問である。

問2 「心理的離乳」の意味を問う設問である。④と迷うが、正確な理解があれば、正解できる標準的な難易度の設問である。

問3 「欲望」を題材にしてソクラテス、プラトン、アリストテレス、エピクロスの思想を比較した設問である。選択肢の文中に3人についての誤った記述があり、受験者の正確な理解を試している。人名とキーワードを単純に結び付けただけの学習では対応できない工夫がなされており、標準的な難易度の設問である。

問4 イスラームの戒律に関する設問である。本試験では資料を読み取らせた設問であったのに対し、追・再試験は資料なしの従来の形式のままである。標準的な難易度の設問である。

問5 問題文の空欄に適語を入れる設問である。aの「ボランティア活動」は常識で入れることができ、bの選択肢も迷うものがなく、平易な設問である。

第4問 「経済のグローバル化と福祉の向上の調和について」

1980年代以降の国際経済の動向、とくに市場原理の浸透を促して、経済の効率性を高める側面をもつグローバル化の進展によって、様々な問題が現れている状況をまとめたリード文である。グローバル化の経済的利点を、国際的・国内的な福祉の向上といかに調和させることができるか、一人一人に問いかけている。

問1 いわゆる「三つの経済主体」の相互関係を問う難易度の低い基本的問題である。

問2 冷戦終結後の国際情勢を問う問題である。基本的な知識を問う標準的な難易度の問題である。

問3 FTAやEPAに関して日本の企業経営者の発言を想定して、FTAやEPAの在り方の理解を問う問題である。企業経営者という特定の立場から経済事象を見るというユニークな設問である。一つの事象が、異なる立場から見れば、どのように見えるかを考えさせる良問である。難易度はやや高い。

問4 1980年代以降の欧州・アジア地域、サハラ以南アフリカ地域、東アジア・太平洋地域におけるODA受取国の純受取額の推移を示すグラフからそれぞれの地域を区別する問題である。80年代後半に市場経済へ移行した東欧諸国や旧ソ連崩壊後の中央アジア諸国への援助の増加、サハラ以南アフリカ地域の経済的困難な状況等を理解している必要がある。単なる知識だけでなく思考力や資料を読む力を問う良問である。

問5 雇用についての法制度に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

問6 地方自治体の制度に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

第5問 「資本主義経済をめぐる諸制度」

先生と学生の会話体のリード文である。まず、アダム・スミスの『国富論』から各人の自己

利益の追求が経済の発展をもたらすことを指摘する一方、バブル崩壊後の長い経済の停滞から、自己利益の追求が経済発展をもたらさないこととの矛盾を示している。そして、1990年代以降の投機的資金の移動による経済の悪化を指摘しながら、アダム・スミスの『道徳感情論』から「見えざる手」が抑制のきいた自己利益の追求を通してもたらされることを示唆している点、作問者の高い見識を伺わせる優れたリード文である、

問1 マルクス、リカード、リストの経済学理論が生み出された当時の社会状況を問う問題である。経済学者の理論を直接問うのではなく、理論を生み出した、それぞれの経済学者が生きた当時の社会状況を尋ねたユニークな問題である。単なる知識だけでなく思考力を問う、やや難易度は高いが良問である。受験者には是非、正答してほしい問題である。

問2 物価に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。リード文との関連がやや薄いように思われる。

問3 国民所得の諸指標に関する基本的知識を問う標準的な難易度の問題である。③の国内総資本形成という用語は受験者にはなじみがなかったかもしれない。

問4 様々な企業の在り方に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

問5 日本銀行の金融政策に関する基本的知識を問う標準的な難易度の問題である。

問6 経済のグローバル化に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。②、③、④は受験者には十分理解しておいてほしい。

問7 1990年代以降の経済危機に関する時事問題を含むやや難易度の高い問題である。なお、UNDP（国連開発計画）の認知度はさほど高くない。消去法で正答を導き出すにも難易度が高い問題である。

第6問「1990年代以降の日本における政治制度改革」

1990年代以降の日本の行政や立法機構の制度改革から政治のリーダーシップを強化する改革の意義を説くとともに、そのことによる問題点にも触れ、人権保障の重要性を述べている。政治をより良いものにするために努力を積み重ねることの重要性を求めたリード文である。ただ、リード文の下線部と設問との関連性が薄い問いがあった。

問1 日本の地方公共団体とアメリカの連邦レベルの政治機構の共通点に関する知識を問うやや難易度の高い問題である。また、リード文の下線部からこの問題の出題には強引さが否めない。

問2 国家公務員に関する制度や実態に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

問3 国会に関する基本的知識を問う標準的な難易度の問題である。

問4 人権保障に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

問5 いわゆる法定手続きと罪刑法定主義に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

ただ、選択肢に日本国憲法の条文を直接使った工夫された問題である。受験者にとって憲法は基本的知識として十分な理解が必要である。

問6 検察審査会に関する知識を問うやや難易度の高い問題である。検察審査会の意義、法的位置付け、最近の制度改革などの知識が必要である。

問7 戦後の日本の政治に関する知識を問う標準的な難易度の問題である。

3 試験問題の分量・程度等について

「倫理」分野の問題は、「倫理」追・再試験の各問題（リード文及び設問）を組み合わせた形で、基本的な問題を中心にして、総合的な思考力・判断力を問う問題から構成されており、適切な分量・程度であった。各分野の問題配分及び配点については、バランスが取られていた。難易度も全体的には標準または平易な問題が多かったが、一部でやや細かい知識理解が問われる設問があった。

「政治・経済」分野の問題は、教科書に基づく基礎的な知識を問う問題を中心に、応用力・思考力を問う問題や時事的な問題、資料を用いて分析力等を問う問題などが盛り込まれている。分量・程度とも適切であった。問題配分及び配点については、政治分野が9問22点、経済分野が11問28点となった。各分野の問題配分及び配点についても、バランスが取れた構成となっており、基礎と応用というレベルでの分類では、基礎的な問題を重視した構成と言える。また、出題内容はおおむね高等学校学習指導要領の目的・内容に適合している。

4 試験問題の表現・形式等について

設問数は、大問数6、設問数39であった。2点と3点を組み合わせた配点となっている。大問は第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。設問数及び解答数は、「倫理」分野が19問、「政治・経済」分野が20問とほぼ同数であり、配点は50点ずつであった。なお表現・配点の一覧表は資料として最後に掲載した。

「倫理」分野の問題は、「倫理」追・再試験の各問題（リード文及び設問）を組み合わせた形であった。リード文は分かりやすく「倫理」の学習者を啓発するものであったが、下線を付した部分が「倫理」追・再試験と異なっていた設問があったり、下線部についての設問としてはやや不自然さが感じられるものがあった。出題形式としては、全ての問題が「倫理」追・再試験からの転用であるため、「用語や人名等の知識を問うもの」、「基礎的・基本的な概念を問うもの」、「思考力、判断力、応用力を問うもの」のバランスは「倫理」追・再試験に準じている。各設問は受験者が十分に理解できる適切な表現であった。

「政治・経済」分野では、リード文には受験者に対するメッセージが盛り込まれ、「政治・経済」の学習者に是非読ませたい部分も多い。第5問は会話文で構成され、受験者の興味関心を喚起する工夫もされている。受験者にもリード文をしっかりと読み込みながら、解答してほしい。しかし設問によっては、リード文との関連性が薄いと思われるものも数問あり、受験者が下線部だけをみて解答する傾向を助長する一因となっていると思われる。出題形式としては、基礎的・基本的な知識や内容を問う設問が中心であるが、図表を基に、知識と併せて思考力を問う問題も見られる（第4問の間4は良問である）。また、第5問の間1は、単に経済理論の内容ではなく、その理論が生まれた契機を問うもので、出題形式が工夫され評価できる。これらのような、単に知識だけでなく、思考力・応用力・分析力を問う設問がもう少し多くてもよいのではないか。

なお「政治・経済」分野の配点については、問題の難易度や内容と配点との関連性が分かり難い箇所があった。また、「倫政」では、「政治・経済」と共通問題が20問あるが、配点が異なる箇所が多く、今後検討していただきたい。

5 要 約（総括的な評価）

- (1) 高等学校学習指導要領との関連においては、各分野からおおむねバランス良く出題されており適切であったと言えよう。また、追・再試験の出題も、高等学校学習指導要領の内容に適合しており、基本的な知識に基づく理解や応用力についてバランス良く問われており妥当なものであった。大学入試センター試験は単に学力評価だけではなく、高等学校での「倫理」「政治・経済」の指導の在り方を方向付ける重要な役割も担っている。このようなことを考慮していただき、今後も「倫理」「政治・経済」の目標である、「良識ある公民として必要な能力と態度の育成」に資するような問題作成に取り組んでいただきたい。
- (2) 全体として、教科書での学習を基本とした出題となっているが、基礎・基本を土台に応用力を問う問題もあった。来年度以降、他の公民科目の問題の平均点に配慮しながら、難易度を調整し、今後も教科書レベルの知識のみを問うだけでなく、基礎・基本を基に思考的・分析的な力を問う問題の出題を希望する。「倫政」本試験と比較すると、資料問題が少なかった事と関連して、思考力、判断力、応用力など総合的な力を問う問題が少ない傾向が見られたが、難易度は全体として標準的であった。今後も単純に知識や概念を問う設問ではなく、日常生活に関連し、受験者が主体的に人生や世界について考察することを促すような出題を意図していただきたい。
- (3) 時事的・社会的な問題を出題することは、日常的に社会現象や現代社会の諸課題に対する興味・関心を持たせ、公民的資質を高める機会となる。追・再試験でも第4問の間3や間4のように、国際的な視野を必要とする問いが幾つか見られた。「倫理」分野も含め、今後もこのような問題が増えていくことを期待したい。
- (4) 各リード文及び資料文は、一部で難解な内容が含まれたが、全体的に示唆に富む意義深い内容となっており、「倫理」「政治・経済」を学んできた受験者を大いに啓発するものであった。

「倫理」分野では、第3問にリード文がなく、これは各分野の設問数のバランスを取る意図があったとも思われるが、学習効果を考えるとリード文の重要性は無視できず、より適切な出題方法が望まれる。また資料文については、追・再試験においては出題されておらず、受験者の視野を広げ、多角的な倫理的思考力や判断力、応用力を測る上で、次年度以降改善して頂きたい点である。「政治・経済」分野では、リード文と設問の関連性が明確でなかったり、リード文の趣旨からは出題意図がくみ取れない問題もあった。改善を切に希望する。

全体的には基礎的・基本的な概念の理解を問う設問が多く、難易度の高いキーワードについては選択肢に配慮が見られ、地道に学習をした受験者が報われる出題であったことは高く評価できる。

資 料 注：（ ）内の数字は配点、また＊印は基本的な問題と判断されたものである。

「倫理」分野

主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	第1問 問3(2)	計 1問 2点
主に基礎的・基本的な概念等についての理解を問うもの	第1問 問1(2) 問4(2) 問2(2) 問5(3) 問4(3) 問6(3) 問5(3) 第3問 問2(2) 問6(3) 問3(3) 第2問 問1(2) 問4(3) 問2(3) 問5(2) 問3(3)	計 15問 39点
主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの	第1問 問7(3) 第3問 問1(3) 第2問 問7(3)	計 3問 9点

「政治・経済」分野

主に教科書に基づく知識により正解が得られる問題	第4問 問1(2)* 問6(2)* 問2(2)* 第6問 問1(3)* 問3(3)* 問2(3)* 問5(2)* 問3(2)* 問6(2)* 問4(3)* 第5問 問2(3)* 問5(2)* 問3(3)* 問6(2)* 問4(3)* 問7(3)* 問5(3)*	計 17問 43点
主として教科書に基づく知識を使って思考力や応用力により正解を導く問題	第5問 問1(2)	計 1問 2点
主として時事的・社会的な知識から国内的・国際的な諸課題を考えさせる問題	第5問 問7(2)*	計 1問 2点
資料やグラフ・図表などを使って基礎的な理解力・分析力を問う問題	第4問 問4(3)	計 1問 3点